

II-5

高悪性度骨髄腫クローン出現の把握と高悪性度クローン治療の効果判定における Ga Scintigraphy 有用性について

○柏村 眞

松戸市立病院血液内科

【目的】高悪性度骨髄腫クローンの出現と分布の把握、治療効果判定：多発性骨髄腫は元来 Indolent な腫瘍であるが、時間と共に悪性度を増していく。悪性度の高い骨髄腫細胞は非分泌型となり、骨髄腫病勢と治療効果判定に用いている M 蛋白や尿中 BJP_r では高悪性度クローンの病勢は判定出来ないこともある。骨髄腫細胞は全身骨の各々の場所で生存競争をし、より強いクローンが悪性度の高い集団を形成。高悪性度クローンは骨を破壊し、病的骨折を来し、患者の QOL を著しく悪化させる。【方法】Ga Scintigraphy による Ga 異常取り込みの有無と分布：骨髄腫は Ga の取り込みは来さないが悪性度が増すと取り込みを認めると報告されている。治療前後に実施、治療効果を判定する。【結果】悪性度の増した症例には Ga シンチを実施。Ga の異常集積を見ることにより悪性クローンの出現とその分布を知ることが出来た。高悪性度骨髄腫細胞が出現した後では、このクローンが病的骨折を来さず可能性が高く、全身の骨髄腫細胞の治療に優先して、高悪性度骨髄腫に Target を絞った治療が必要になる。M 蛋白や BJP_r ではこのクローンの病勢を知ることは出来ない。治療前後に Ga シンチを行うことにより高悪性クローンへの治療効果判定が可能であった。多数の病変の中には治療後の Ga の減弱に差が見られることもあった。このような場合には残った高悪性度クローンに対し、放射線療法を選択した。【結論】Ga シンチは高悪性度骨髄腫の管理に有用である。